

レッド・ウィング2015年新作をアップデート!

RED WING

2015

NEW MODELS

文・飯野高広 (P14-15)、佐藤大典 (P16-23)、本誌編集部 (P4-5、P6-13)、写真・藪崎 大 (WPP)

今秋発売するモデルも含めて、レッド・ウィングの2015年ニューモデルが出揃ってきた。さっそくではあるが、巻頭にあたってそれらの一部をご紹介することにしよう。まず注目したいのは、レッド・ウィングが110周年を迎える今年、それを記念するモデルとして発表した「110周年記念ブーツ “HUNTSMAN”」だ。レッド・ウィング社成功の象徴である#877のルーツともなり、同社の長い道のりを表わすブーツが完成したのだ。20世紀初頭の靴を思わせるレッド・ウィングのもうひとつの機軸、クラシックドレス・ラインには、「ジラードブーツ」、「キャバリーチャッカ」がラインアップされた。ソールやレザーにこだわり、「魅せるワークブーツ」のレンジをさらに広げている。ワークブーツの本線を体現するヘリテージワーク・ラインには、「(ワイドパネル) ラインマン」、「ロメオ」、オロラセットの「エンジニア」をラインアップ。ベーシックなスタイルを維持しながら今日のテイストを加味している。サービスシュー／ワークオックスフォード・ラインからは、ゴールドラセットがアイコンであるアイリッシュセッターの短靴「アイリッシュセッターオックスフォード」と、ポストマンの6インチ丈「ポストマンブーツ」が加わった。いずれも同社のアーカイブに範をとりながら、アップデートされたデザインが見てとれる。

p06



#2015
110th ANNIVERSARY BOOTS

今年創立110周年を迎えるレッド・ウィングの、その歴史が感じられるアニバーサリーブーツ。

p08



#9090 #9091
GIRARD BOOTS

アメリカ開拓時代の紳士靴の主流であった6インチ丈、伝統のモックトゥを今日流に再現。

p08



#9095 #9096
CAVERLY CHUKKA

ヘファーハイドを使い、レッド・ウィングがドレスラインにさらに踏み込んだ注目のブーツ。

p12



#2995 #2996
(WIDE PANEL) LINEMAN

レーストゥートゥとワイドパネルの優雅でクラシックなシルエットに魅了される、美しきワークブーツ。

p16



#8142 #8145
ROMEO

脱ぎ履きしやすいサイドゴアを配したスリッポンタイプ、レッド・ウィングから久々の再登場。

p18



#9895
IRISH SETTER OXFORD

ゴールドラセットを使い、1950年代半ばのオックスフォードのディテールを再現した渾身のモデル。

p20



#8271
11" ENGINEER (STEEL TOE)

人気のオロラセット“ポーテージ”を採用した、色鮮やかなエンジニアブーツが帰ってきた。

p22



#9197
POSTMAN BOOTS

ポストマンとポリスマンのためにつくられた、9つハトメの6インチブーツが半世紀を超え登場。

RED WING 2015 NEW MODELS

diggin'
into RW



滑りにくくするため、ラバーに混ぜソールに入れて成型されたコード(紐)。



ハンツマンのネタ元となった1930年初頭まで製造されていた#668。甲のモカシン縫い部分は、ウエルトをソールに縫いつけるミシンを使用して縫い合わされており、当時の他のモカシンよりも強靱な構造になっていた。



1960年代中頃から1996年まで使用されていたプリント羽根タグを再現。1980年代後半まで採用されていた、クォーターの内側のスタンプを復活。1962年まではほとんどレザーレースだったことにちなみ、ブラック「クロンダイク」の色に合わせたコーヒーカーラーのクラシックなレザーレースを採用。創業間もない頃から1990年代中頃まで、レッド・ウィングの商品には右足のクォーター内側上部に「RED WING」の刻印を施していた。

レッド・ウィングの 新たなソール「グロコード」

今年、レッド・ウィングの新しいソールとして開発された「グロコード」。もともと、グロコードソールはオハイオ州のリマ・コード・ソール&ヒール社が1920年代にレッド・ウィング社のために開発したラバーソールである。コード(紐)をラバーに混ぜて成型し滑りを防いだことで、ワーカーの作業場やハンターフィールドでも成果を発揮した。このグロコードソールが時を経て、今日レッド・ウィングのゴルクソール、コードソールへ発展した。1920年代後半には、いくつかのトレッドパターンのものが開発され、その機能の幅を広げ、さまざまなモデルに採用されたソールである。クラシックなワークブーツがもつ意匠として注目すべきポイントである。



1950年代に使われていたグロコードソール。



No.2015 Huntsman

レザー/ブラック「クロンダイク」
製法/グッドイヤーウエルト
ソール/グロコードオンレザー
ラスト/No.326
サイズ/D7-11、12、13 E7-11、12、13
価格/5万9400円

同社の古いカタログから。首長ワクタ・レッド・ウィングのロゴが入ったグロコードソール。

戦前のアメリカのハンティングブーツの多くはブラックのレザーだったので、ハンツマンではブラック「クロンダイク」レザーを使用。履きこむにつれ、レザーの塗膜が色落ちし、経年変化を味わえる。

110年の歩みを体現するモデルなのである。

ハンツマンはこのように、同社のハンティングブーツの原点に立ち返り、進化の道のりのおかげで身につけた仕様を今日的に生き返らせた、まさにレッド・ウィングブーツの歩みを体現するモデルなのである。

今年110周年を迎えるレッド・ウィング社の記念モデル「ハンツマン」は、1930年代のハンティングブーツ(#668)をベースモデルとして作る。

#668はレッド・ウィング社で初めてハンティングに特化して開発されたモデルで、ブラッククロームレザー(現在のものとは違い油分が多い)とコードソールを使ったモカシントウの10インチ丈ブーツであった。1939年には生ゴム素材のクレープソールに変更した#686を開発したが、そのクッション性と静音性から、獲物に気づかれにくいという理由で、ハンターたちにアピール、これがのちにトランクシヨントレッドソール開発のヒントとなる。

#668から始まるハンティングブーツの変遷は、1952年に発売された同社の代表的モデルとなる#877の誕生へと導かれる。その過程で同社のアイコンであるオロラセツトレザーやアイリッシュセツ

#2015 110th ANNIVERSARY BOOTS "HUNTSMAN"

今年創立110周年を迎えるレッド・ウィングの、その歴史が感じられるアニバーサリーブーツ。





No.8173
**Classic Work/
6" Moc-toe**

レザー/ホーソーン"アビレイン"ラフアウト
製法/オールアラウンド・グッドイヤーウエルト
ソール/トラクシヨントレッド
ラスト/No.23
サイズ/E4-11, 12, 13
価格/3万9852円



No.8876
**Classic Work/
6" Moc-toe**

レザー/カッパー"ラフ&タフ"
製法/オールアラウンド・グッドイヤーウエルト
ソール/トラクシヨントレッド
ラスト/No.23
サイズ/E4-11
価格/3万9852円



No.8875
**Classic Work/
6" Moc-toe**

レザー/オロラセット"ポータージ"
製法/オールアラウンド・グッドイヤーウエルト
ソール/トラクシヨントレッド
ラスト/No.23
サイズ/E4-11, 12, 13
価格/3万9852円



No.8179
**Classic Work/
6" Moc-toe**

レザー/ブラック"クローム"
製法/オールアラウンド・グッドイヤーウエルト
ソール/トラクシヨントレッド
ラスト/No.23
サイズ/E4-11, 12, 13
価格/3万9852円



No.9875
**Irish Setter
6" Moc-toe**

レザー/ゴールドラセット"セコピア"
製法/オールアラウンド・グッドイヤーウエルト
ソール/トラクシヨントレッド
ラスト/No.23
サイズ/E6.5-11
価格/4万4820円



No.9874
**Irish Setter
6" Moc-toe**

レザー/ブラック"クロンダイク"
製法/オールアラウンド・グッドイヤーウエルト
ソール/トラクシヨントレッド
ラスト/No.23
サイズ/E6.5-11
価格/4万4820円



No.9850
**Irish Setter
6" Canoe Moc**

レザー/ゴールドラセット"セコピア"
製法/オールアラウンド・グッドイヤーウエルト
ソール/トラクシヨントレッド
ラスト/No.23
サイズ/E7-11
価格/5万6808円



No.9851
**Irish Setter
6" Canoe Moc**

レザー/オロラセット"ポータージ"
製法/オールアラウンド・グッドイヤーウエルト
ソール/トラクシヨントレッド
ラスト/No.23
サイズ/E7-11
価格/5万6808円

RED WING
[HERITAGE WORK]
CLASSIC WORK
6" MOC-TOE



No.875
**Classic Work/
6" Moc-toe**

レザー/オロ"レガシー"
製法/オールアラウンド・グッドイヤーウエルト
ソール/トラクシヨントレッド
ラスト/No.23
サイズ/E4-11, 12, 13
価格/3万9852円



No.8852
**Classic Work/
6" Moc-toe**

レザー/ベルバ"リタン"
製法/オールアラウンド・グッドイヤーウエルト
ソール/ブラックトラクシヨントレッド
ラスト/No.23
サイズ/E6.5-11
価格/3万9852円



No.8853
**Classic Work/
6" Moc-toe**

レザー/インディゴ"ポータージ"
製法/オールアラウンド・グッドイヤーウエルト
ソール/ブラックトラクシヨントレッド
ラスト/No.23
サイズ/E6.5-11
価格/3万9852円

【基本データ】

レッド・ウィングと聞いて誰もが最初に思い浮かべるモデルは、日本では恐らくこれだろう。狩猟向けに1930年代後半に開発されたブーツに起源をもち、その後の同社繁栄の基礎となった8インチブーツ#877、その6インチモデルである#875だ。登場は1954年。足扱いに優れたモックトゥと、クッション性が高くかつ軽量のトラクシヨントレッドソール、さらにはオイルの豊富なオロラセットレザーを用いたアッパーの組み合わせは、この靴を単なるハンティングブーツからアメリカ全土を支えるワークブーツへと昇華させた。登場後半世紀以上たった今、その存在感がますます輝きを増しているのも頷ける。

4. Goodyear Pac Moc EK

わが国では「拝みモカ」と称する、二枚の革を縫い付けるモックトウの元祖であるインディアンモカシンの製法に最も近い方式。ただしレッド・ウィングではこれを手縫いで施すのではなく、何と底づけに用いるグッドイヤーマシンで縫い上げる。この画期的な技法は1932年にボーイズ向けのブーツから導入したが、これはアメリカの靴メーカーでは最初の部類だった。以来ゴルフシューズやカヌーシューズなどのアウトドアスポーツ系の靴にしばしば採用され、次第

にハンティングブーツのモカシン縫いはこれのみで製造するようになった。当然1952年登場の#877そして翌々年デビューの#875にも採用され、同社のハンティングブーツを象徴するディテールとなった。やがてそれらがワーカー達に愛用されるようになった結果、ワークブーツとして開発された靴にもこの意匠が用いられるようになった。



1952年のカタログに初めて載った名作#877。



EとKの拡大写真。二枚の革を縫い上げるのを通じ豊かな表情を出している。底づけ用のマシンでは思えない丁寧さ！

1. Goodyear Embossed Moc CI

CとIの拡大写真。一枚の革を浮き上げさせるのを通じて、ボリュームのある凹凸を出しているのがお判りいただけよう。

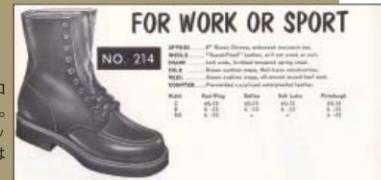


インディアンモカシンに見られる二枚の革の縫い目の凹凸を、一枚の革にエンボスづけ、つまりその裏面から押し上げ浮かせてステッチをかけることで、擬似的に表現した飾りモカの一種。こちらは4と同じく底づけに用いるグッドイヤーマシンで縫われたもの。ボリューム感のある表情となるため、主にワークブーツのモ



1966年カタログより。左のワークブーツは1であるのに対し、右のハンティングブーツは4を用いている。

1960年カタログにある#214。エンボスドモックだがマシンは不明。



5. English Moc DFJ

日本語では「かぶせモカ」と称し、二枚の革の縫い目を上の革=プラグで覆うモカシン縫い。防水性に優れた構造になる点が雨の多いイギリスを想像させるのか、英国本国ではともかくアメリカでは「イングリッシュモック」と呼ばれている。レッド・ウィングでは1963年に発売された当時のハンティングブーツの最高級バージョン#888で初採用され、その後は主にアウトドアスポーツ向けの靴に用いられた。かの定番#875も、1963年~'65年の3年間だけはモカシン縫いがこの技法だ。

1970年代にはハンティングブーツに加え軽トレッキング向けのチャッカブーツにも採用され、後にアイリッシュセッターの軽量モデルにも採り入れられた。現行品ではアイリッシュセッターの#9850がこの仕様である。なおこの技法は、靴の釣り込み方法を工夫すればハンドソーンモカシンに近い構造で靴を製造可能なことから、1980年代中頃から同社ではコンフォートタイプのワークフットウエアにも活用している。



1963~'72年に販売されたこの#888が5を採用した最初のモデル。



向かって左からDFJの順。文字通り上の革を縫い目にかぶせ切っているのが、5の大きな特徴である。特に最後のJにご注目いただきたい。これは1960年代の中盤の#875で、この期間の3年だけモカシン縫いは1ではなくこの5であった。

果たしてどなか？ 気になる人は今すぐチェックだ！（飯野）

もうひとつの分類はモカシン縫いを一枚のアップパーで構成するか、二枚のアップパーでつくりあげるかである。レッド・ウィングの現行品のモカシン縫いは上の5つに大別できるが、そのうち前者は1・2・3であり、わが国ではこれを「飾りモカ」と総称する。一方4と5は後者で、モカシンの原型に近いのはこちらだ。いずれにせよレッド・ウィングでは靴の用途や性格に応じてこれらを巧みに使い分けている。自分の一足が



E

D

C

B

A

K

J

I

H

G

F

OVERLAY MOC



5と類似するが、下の革=ヴァンプの断面を立ち上げ上の革=プラグと縫合するそれとは異なり、ヴァンプの表面にプラグを乗せた状態で縫い上げるのが大きな違い。日本では「乗せモカ」と称する。レッド・ウィングでは1932年に4とともに導入されたものの、ワークブーツではその際南部の油田地帯向けのものに取り入れられたのが唯一の採用例。それ以降もドレス系オックスフォードに採用されたが、現在は使われていない。

縫い方の違いが、靴の用途の違いに直結する

足

添いに優れたモックトウIIモカシン縫いは、ネイティブアメリカンの履物が起源のひとつであり、レッド・ウィングのみならず米国ブランドの靴ではお馴染みの意匠だ。しかしよく見るとさまざまな種類のものが存在する。ここではふたつの大きな切り口で考察してみよう。

モックトウの元祖、インディアンモカシンは、足底から革で足を包み、手縫いで仕上げる方式。米国にはこの方式のハンドソーンモカシンが多く残っている。しかしアップパーが底面を覆わないグッドイヤーウエルトを採用するレッド・ウィングの場合は、マシンでモックトウをつくりあげる。マシンだからといって丁寧さに劣るといことは断じてないので、その点にはご安心あれ。



上の靴がA、下の靴がGである。前者のステッチが3条であるのに対し、後者は一般的な2条。この自由度こそステッチドモック！

今回紹介するものなかでは最もシンプルな、U字型のミシステッチだけで表現される飾りモカ。純粋にデザイン上のアクセントであるため、2条のみならず3条、4条のステッチも、使用されるミシ

レッド・ウィングのモック・トウ

2. Singer(Embossed)Moc BH

1925年のカタログより。コードで凸をつくった？



上はエンボスを施したBつまりジラードブーツ。下はそれを施していないH。シンガーマシンの飾りモカは、やはり1より繊細だ！

3. Stitched Moc AG

ンの種類もさまざま、靴の用途や性格に応じてシンガーマシンをはじめ、時には底づけを行なうグッドイヤーマシンも活用される。まず1920年代後半から'30年代前半にかけてボーイズブーツに使用された。その後はしばらくこのモカでつくられた靴はなかったが、1952年にワークオックスフォードとワークブーツで徐々に使用され、その翌年には現在のガレージマンのオリジナルとなるモデルにも用いら

れた。その後は主にワークオックスフォード系に採用され今日に至っている。



現在のガレージマンのブーツとなる#466。ステッチは3条だ。



1955年に発売された#444には細太2種類の2条ステッチが入る。

